

2023年2月5日  
宮崎中部教会主日礼拝  
牧師 乾元美

詩編 49：8～16

ヘブライ人への手紙 2：14～15

「わたしたちのため」

(ハイデルベルク信仰問 40～42) ※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【前奏】

【招詞】 申命記 6：4～5

【祈祷】

【聖書】 詩編 49：8～16、ヘブライ人への手紙 2：14～15

【説教】 「わたしたちのため」

<イエスさまのまことの「死」>

教会の信仰を言い表している「使徒信条」という信仰箇条があります。今は毎週、その一語一語を、『ハイデルベルク信仰問答』に導かれながら、紐解いています。

今日は、神の御子であるイエスさまについて告白する、第二段落目の文章の中から、「死にて葬られ」という言葉に注目します。

「死にて葬られ」。イエスさまは、十字架につけられ、「死んで、葬られた」。この告白は、まことの人間となられた、まことの神であるイエスさまが、本当に死なれた。わたしたち人間すべてに訪れる死を、完全に死なれた。そのことを告白しています。

今日の『ハイデルベルク信仰問答』の問 40、41 は、このような問答です。

「問 40 なぜキリストは『死』を苦しまなければならなかったのですか。」

「答 なぜなら、神の義と真実のゆえに、神の御子の死による以外には、わたしたちの罪を償うことができなかつたからです。」

「問 41 なぜこの方は『葬られ』たのですか。」

「答 それによって、この方が本当に死なれたということを証しするためです。」

これまでも繰り返し、イエスさまの十字架の死は、わたしたち人間の罪の償いのための死である、ということが語られてきました。

イエスさまの死は、わたしたちが神さまに背いた罪を、自分自身ではもはや償えないゆえに、イエスさまが、わたしたちの身代わりとなって死んで下さったものなのです。

…わたしたちの代わりに罪をすべて被り、それを償うため。神の御子イエスさまは、まことの人間となって、この世にお生まれになりました。

そして、その御生涯において、罪に捕らわれて生きるわたしたち人間が味わう、あらゆる悲惨さを経験なさいました。すべての苦しみをお受けになりました。

しかし、たった一つ、わたしたちと違ったのは、イエスさまが、初めから最後まで、神さまの御心に従順に従い抜かれた、全く罪のないお方だった、ということです。なぜなら、罪のないお方でなければ、自分も罪を犯しているのに、他の人間の罪を肩代わりすることなど、できないからです。

そしてイエスさまは、そのご生涯の最後には、本来、神さまに背いたわたしたちが受けるべきであった、神の怒りを、神の裁きを、有罪の判決を、そして永遠の刑罰を、身代わりとなってご自分が受けて下さった。そのために、十字架で木にかけられ、神に呪われた死を、死んで下さった。

それが、イエスさまが十字架で死なれたことの意味でした。

問 40 で、なぜキリストは「死」を苦しまなければならなかったのですか、と問うているのに対して、「なぜなら、神の義と真実のゆえに、神の御子の死による以外には、わたしたちの罪を償うことができなかつたからです」と、書かれている通りです。

ですから、イエスさまは、まことに、本当に、死ななければなりませんでした。そうでなければ、わたしたちの罪の償いにはならないからです。本当に死ぬのでなければ、わたしたちが受けるべき呪いの死を、引き受けることは出来ないからです。

イエスさまは、お墓に葬られました。死んだということが、しっかり確かめられ、死人として取り扱われ、遺体がお墓の中に納められたのです。このことは、問 41 の答えにあるように、「この方が本当に死なれたということを証し」しているのです。

<わたしたちの「死」>

こうして、イエスさまが「死にて葬られ」たこと、まことに死なれ、それがわたしたちの罪の償いのためであった、ということが確かめられました。

しかし、そこで『ハイデルベルク信仰問答』は、面白い、そして真剣な問いを投げかけます。それが問 42 です。こうあります。「キリストがわたしたちのために死んでくださったのなら、どうしてわたしたちも死ななければならないのですか。」

イエスさまが、わたしたち罪人の代わりに死んで下さったおかげで。わたしたちは、罪のために裁きを受け、神さまの怒りの許で、その永遠の罰を受けて、呪われた死を死ぬ、ということは免れたはずですが。

でも、それなのに、やっぱりわたしたちは、いずれ死ぬのです。それはどうしてなのですか。そういう問いです。これは素朴な疑問です。でも、これは真剣で、まさにわたしたちの実存がかかっている問いなのではないでしょうか。

わたしたちに必ず訪れる死。生きているものは、必ず死にます。この世にあるもので、永遠のものは、何一つありません。死ぬということ。これは例外なく、すべての者に訪れます。

そして、わたしたちは他の人の死を見つめることはありますけれども、自分の死については最後の最後まで分かりません。

ただ、死んだものの体が、朽ちて、失われることだけは知っている。自分の体も、死んだらそうになっていくだろう、ということは知っているのです。

ですから当然、死んだら体を失い、地上の営みが途絶えます。親しい者たちと共に過ごせなくなる。何か途中で、何もできなくなる。語ること、伝えることが出来なくなる。

そう考えると、だんだん不安になってきます。死ぬ時に、後悔や、やり残したことがあったらどうしよう。憎しみや、怒りを抱えたままだったらどうしよう。誰かを悲しませたら、誰かを赦せないままだったら、誰かに赦してもらえないままだったら、どうしよう。

また死ぬ時に、体の痛みや苦しみがあるのか、ないのかも、それが最終的にどんなものなのか、わたしたちには分かりません。怖いだろうか。辛いだろうか。

自分の「死」について、それは必ず来るというのに、わたしたちは全く何も分からないし、全く何もままならないのです。だから、わたしたちは死というものを、不安がったり、恐れたり、あるいは逆に、考えないようにしようとするのかも知れません。

<「死」とは>

しかし、どうしても、わたしたちはやがて死ぬ。それはどうしてか。それに対して、ハイデルベルク信仰の間 42 の答えは、こう言っています。

「答 わたしたちの死は、自分の罪に対する償いではなく、むしろ罪の死滅であり、永遠の命への入口なのです。」

…わたしたちは、これまで、自分の命や、人間の存在ということ、聖書を通して示されてきました。

『ハイデルベルク信仰問答』においても、わたしたちには、「神さまの創造と摂理」を信じる信仰が示されました。この世界は、またわたしたちの命は、神さまがお造りになったということ。だから神さまは、わたしたちをご自分の良いご計画のもとで生かし、恵みの御心に従って、全能の力をもって、終わりの日まで守り導いて下さる、という信仰です。

そうであるならば、わたしたちは、自分の死、人間の死についても、聖書から示されなければなりません。

さて、聖書は「死」というものを、二つの側面から捉えているようです。

一つは、この肉体の自然的な死です。この世に存在する肉体が、永遠ではないこと。やがて衰え、朽ちていくということ。その当然やってくるべき「死」です。

そしてもう一つは、神さまとの関係を失うことの「死」です。こちらは、より根源的です。わたしたちは神さまと共に生きる者、神さまの呼びかけに応答し、神さまとの関係の中で生きる者として創造され、命を与えられました。だからわたしたちは、神さまとの関係にあってこそ、まことに人間本来の生を生き、与えられた命を全うすることが出来るのです。

わたしたち人間が「生きている」とは、この肉体が生きていることと、神さまとの関係に生きていること、この両方において、まことに「生きている」と言えるのです。

しかし人間は、わたしたちと共に生きようとなさる神さまの思いに背いて、罪を犯しました。神さまの御言葉に従わず、神さまを愛すること、隣人を自分のように愛することをしませんでした。そして、神さまの呼びかけに答えず、神さまから離れ、神さまとの関係を自ら破壊したのです。

すべての人間が、このような罪に捕らわれています。そうであるならば、わたしたちは皆、神さまとの関係を失っている時点で、本来、生きるべき生を生きられなくなっている。神さまとの関係において、死んでいる者、失われている者となっているのです。

そして、罪に捕らわれたまま、神さまとの関係が破壊されたまま、わたしたちが肉体的に死ぬこと。それは、神さまとの完全な断絶となるのです。罪のために、わたしたちの肉体的死は、そのまま神さまから永遠に切り離されることを意味する、呪われた死となるのです。

それが、罪を犯した人間の死であり、罪の結果もたらされる死、神さまの裁きにおける、永遠の刑罰としての死なのです。

#### <イエスさまの「死」>

しかし。その永遠の刑罰の死は、呪われた死は、わたしたちの救い主として遣わされたイエスさまが、ご自分の身に引き受けて下さいました。わたしたちが罪のために死ななければならなかった死を、十字架によって、イエスさまが代わりに死んで下さいました。

なぜ、そんなことをして下さるのでしょうか。なぜ、そこまでして下さるのでしょうか。

それは、わたしたちをお造りになった神さまが、御子イエスさまの命を惜しまないほどに、わたしたちを愛しておられるからです。それほどまでに、わたしたちを憐れんで下さったからです。神さまの方が、わたしたちが神さまから離れ、そのまま滅びへ向かって死んでいくことに、我慢ならない、耐えられない、と言って下さったのです。

今日の、新約聖書のヘブライ人への手紙 2 : 14~15 には、こうありました。

「ところで、子らは血と肉を備えているので、イエスもまた同様に、これらのものを備えられました。それは、死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たちを解放なさるためでした。」

わたしたちを、罪による滅びの死から、解放するために。わたしたちを、神さまから断たれてしまう、まことの死の恐怖から、解放するために。この、わたしたちのために。神の御子イエスさまは、まことの人間となり、わたしたちが死ぬべき、罪によるまことの死を、神との断絶の死を、永遠の刑罰となる死を、死んで下さったのです。

わたしたちは、十字架上での、あのイエスさまの叫びを思い起こします。

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」(マルコ 16 : 34)。

これは、罪人が神さまの怒りと裁きを受け、断絶の死を味わって死んでいく、絶望の叫びでした。この叫びを、罪のないイエスさまが、わたしたちの代わりに叫ばれたのです。

罪人が死ぬべき、神さまから断たれ、肉体も死ぬ、体と魂をもって受ける徹底的な永遠の刑罰を、まことに死なれたのは。救い主であるイエスさま、ただお一人だけです。そしてわたしたちは、このお方のゆえに、もうこの絶望の死を味わう必要はなくなったのです。

#### <神さまとの関係の回復>

わたしたちは、このイエスさまの十字架の死を、わたしの罪の償いのための死として受け取ります。それは具体的には、わたしたちが、このイエスさまの十字架の死による救いを信じ、洗礼を受けるということです。そこで、わたしたちはイエスさまと一つに結ばれます。

その時、わたしたちは、イエスさまの十字架の死に与って、「神さまとの関係を破壊した罪人であるあなたも、そこで一緒に死んだ」と、そう宣言されるのです。

イエスさまの死に与って、わたしたちは罪に対して死んだ者とされます。

そして、わたしたちは罪から解放されて、破壊してしまった神さまとの関係を、回復させられるのです。そこからわたしたちは、神さまと共に生きる命を、まことの命を、肉においても魂においても、新しく生き始めることが出来るようになるのです。

そのように、永遠なる、生ける神さまとの、恵みの関係の中で生きる命こそが、「永遠の命」と呼ばれるものです。

永遠の命とは、死んだ後の命のことではありません。この地上にあって、この体において、洗礼を受け、イエスさまに結ばれたその時から、わたしたちは、永遠なる神さまとの関係の中で生きる、「永遠の命」を生き始めるのです。ですから、イエスさまに結ばれた者は、今この時も、すでに、永遠の命を生き始めている、とすることが出来るのです。

そうであるなら。イエスさまに結ばれ、永遠の命を生き始めた者にとって。やがて来る、この地上の肉体の死は、もはや、神さまとの断絶の死ではあり得ません。それはもはや、呪われた死ではありません。

なぜなら、地上の肉体の死を迎えても、わたしたちはイエスさまに結ばれ続けているからです。永遠なる、生ける神さまとの関係は、もう永遠に終わることがないからです。

わたしたちが、地上の肉体の命を終える時。それは、罪人として死ぬのではありません。わたしたちは、罪を赦されている者として死ぬ。神の子として死ぬ。わたしたちはイエスさまに結ばれ、担われたまま、地上を歩み、そして死んでいくのです。

#### <罪の死滅>

そのようなわたしたちが迎える死は、もはや罪による刑罰の死ではなく、地上における、罪との戦いの終わりの時である、と言われます。

それが問 42 で、わたしたちの死が、「罪の死滅」の時である、とされていることです。

根本的には、わたしたちはイエスさまによって罪から解放されています。しかし、それでもなお、終わりの日が来て、救いが完成するまで、地上を歩むわたしたちは、自分の弱さのために、罪を繰り返し、世の誘惑にも遭い、足元が揺らぎ、倒れたりすることもあるのです。

でも、そのようなわたしたちを、すでに罪と死に打ち勝たれたイエスさまが、いつも担い、支え続けて下さいます。ですから、わたしたちは一生涯、この方の十字架にあって、日々罪に死にながら、日々赦されながら、日々悔い改めながら、歩いていくのです。

そしてその地上の歩みはやがて終わり、わたしたちの罪との戦いも終わります。

#### <永遠の命>

そしてまた、わたしたちの死は、「永遠の命への入口なのです」と言われています。

先ほど申し上げましたように、わたしたちはイエスさまを信じて、洗礼を受け、イエスさまと結ばれた時からすでに、「永遠の命」を生き始めています。

でも、まだそれは地上にあっては、完全に見えるものではなく、わたしたちには、おぼろにしか見えていないものです。

しかし、やがて地上の歩みを終えた時。神さまが召して下さった道を歩み通した時。わたしたちは、いよいよ救いが完成し、復活に与り、これまでおぼろにしか見えなかった「永遠の命」の恵みを、神さまとの深い真実な交わりを、はっきりと見て味わうことが出来る。死ぬとは、その始まりに、その入口に、いよいよ立つ、ということなのでしょう。

聖書では、イエスさまを信じて死んだ者たちのことを、「眠りについた人たち」と呼びます。眠りについた人。それは、やがて目覚める人である、ということです。

地上でイエスさまに結ばれて死んだ者たちは、やがて終わりの日に、復活の新しい体を与えられ、神の国で、起き上がらせられるからです。

わたしたちは死んだら、復活に与ります。それは、イエスさまが、十字架の死から復活させられたことによって、わたしたちにも確かに保証されていることです。

やがて、わたしたちは死ぬでしょう。そして終わりの日を迎え、復活の体を与えられるでしょう。そして、救いの完成を見る。生きておられる復活のイエスさまを、この目で仰ぎ、その御声をこの耳で聞き、その御体にこの手で触れさせていただくことが出来るでしょう。

そして、先に眠っていた人々、イエスさまに結ばれて先に召された兄弟姉妹たちとも、復活の体をもって、神さまの御国で再び相見え、共に喜びの主の食卓に着くでしょう。

イエスさまの死によって、罪を贖っていただいた後の、わたしたちの死。

それは、地上の罪との戦いから解放され、地上では目に見えなかった永遠の命の喜びが、いよいよ、まざまざとこの目で見えるようになる。復活の命がまさに始まらんとする。その入口に立つ時とされているのです。

わたしたちの死は、まさに神の国に迎えられる時、喜びの凱旋の時とされているのです。

#### <生きるにも死ぬにも>

だからこそ、わたしたちは、今この地上で、生きることに召されている命を、真剣に、大切に生きなければなりません。神さまがお決めになった時までは、しっかり神さまに向かって、イエスさまに従って、与えられた道を、歩み通していきたいのです。

時には、地上の苦しみ、悩みの中で、早く御国に行きたいと、そう願うことがあるかも知れません。しかし、今日、わたしたちが生きているのは。わたしたちをお造りになり、罪から救い、そして神の国の完成へと向かって、すべてを導いて下さる神さまが、その恵みのご計画の中にあって、今日も、わたしが生きることを望んで下さったからなのです。

今日、わたしが生きることに、神さまの御心、神さまの恵みのご計画があるのです。

そして今日わたしが生きるために、神さまは、必要なあらゆる恵みを注ぎ、支え、守り、導いて下さっている。わたしたちは、その御心にお応えする者でありたいと願います。

生きることも、死ぬことも、すべてが神さまの愛の御手の中にあります。

そして、生きるにも、死ぬにも、わたしたちはイエスさまに結ばれています。

このことさえ確かならば、何も恐れることはありません。なぜなら、わたしの苦しみも、罪も、裁きも、死も、すべてイエスさまが、担って下さっているからです。そして、喜びも、平安も、慰めも、復活も、すべてイエスさまから、与えられるからです。

『ハイデルベルク信仰問答』の一番最初の間答が、深く響いてきます。

「生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。」

「わたしがわたし自身のものではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主、イエス・キリストのものであることです。」

生きるにも、死ぬにも、わたしたちは、このただ一つの慰めの中に置かれているのです。

#### 【お祈り】 天の父なる神さま

御子なるイエスさまが、わたしたちの罪のために、最も苦しみに満ちた死を、まことに死んで下さったこと。そして、わたしたちが死の恐怖から解放され、今や、神さまと共に生きる永遠の命を生き始める者とされていることを、心から感謝いたします。

どうかわたしたちを、生きるにも、死ぬにも、主のものであらせて下さい。

また、一人でも多くの者が、主に結ばれ、共に永遠の命と、復活の希望に与ることが出来ますよう、聖霊によってお導き下さい。

このお祈りを主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

【讃美歌】 298 「ああ主は誰がため」

【信仰告白】 使徒信条

【聖餐】 【讃美歌】 76 「今こそ歌いて」

【献金】 【主の祈り】

【讃美歌】 27 「父、子、聖霊の」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン